

森について

TENSION 井上 好司

山遊びを始めておおよそ 6 年、海遊びはその 1 年前から。当時海に出る目的、山に入る目的は、気持ちいいから、自然が美しいから、楽しいから、とつまり単純な動機だった。今でもその単純な動機がなくなったわけではないが、また違った目的が次々と現れて変わってきている。真摯に自然と向き合ってきた当然の流れだと思っている。

自然と真摯に向き合うと何が見えてくるか？土、水、気、木、日、月。自然のサイクル、地球のシステム、そんなものが見え始め、その奥深さに興味は尽きない。山に入ったり海に出ることによって普段生活する中で纏っている保護服が取り払われ五感が解放される。直接自然と接することの快感と怖れ、そんなところに自由を感じつつ大切なことを学び、その自由度を深めていっているように思う。

山遊びをしてみて僕の興味は山そのものより、森を廻る自然のサイクルに向いていることに気付いた。

森は大きく自然林と人工林の二つに分類することができる。自然が作った自然林、人間が作った人工林。人工林は太平洋戦争後、建築資材不足を補う目的で広葉樹林であった自然林を伐採して建築資材に向いている杉やヒノキなどの針葉樹を植林して作られた。日本の森林の約 4 割が人工林。

また自然林は原生林と二次林とに分類できる。原生林とは人間の手が入っていない森。原生林に対して自然災害(台風や山火事)や人が利用するために伐採した後、自然に再生している森が二次林。日本の国土には原生林がほとんど残っていない。ほとんどの自然林は二次林。

二次林と人工林には人間の手入れが必要。陽の光が地面にまで届くように枝打ちしたり、樹が大きく太くなるためには間引き等手入れをしないといけない。建築資材が外国の木材の方が安く手に入る時代になって、人工林の植樹された樹木はほったらかし状態になってしまった。森が荒れ始めた。

日本の森の大半は広葉樹林だった。冬になれば葉を落とす。落ちた葉はその場で朽ちて腐葉土となる。腐葉土には微生物やバクテリアが発生し土を豊かにする。広葉樹は大地に深く広く根を張る。腐葉土そのものにも保水力がある。土の豊か

な森は降った雨や冬に積もった雪の雪解け水を貯めこむことができる。土地に潤いがあり乾かない。

沢ができ川が生まれる。豊かな土地の潤いを源としている川の水は当然のことながら栄養素が濃い。栄養素の濃い川の水が海に流れて、植物プランクトンを発生させる。豊かな森が豊かな川を作り、その河口から先に魚介類や海藻が豊富な豊饒の海を育てる。

森が消えたら海が死ぬ。

森が荒れだし、川にダムが作られ、海岸線には道路、防波堤など陸と海を遮る人工物が作られ、海に栄養分が行き届かなくなった。針葉樹の葉の腐葉土は栄養が乏しい。根は浅く横に広がらない。針葉樹林には保水力がなく降った雨水は土を削りながらそのまま流れる。ますます栄養素がなくなる。大雨が降れば保水力がないから雨水は一気に流れ水害を起こす。

日本の沿岸から魚介類が減り海草や海藻が育たなくなった。養殖の海苔や牡蠣の育ちも悪くなった。日本の漁業就労者も激減。林業就労者は壊滅的。

森は海の恋人。

漁業者が自分たちの海にそそぐ川を遡って山に入り、植林し手入れして森を再生させる。人工林を作る場合、針葉樹だけを植えるのではなく広葉樹と混ぜながら植林する。広葉樹の根が横に深く張り、土を強固にする。広葉樹の落ち葉が腐葉土になって豊かな土を作る。栄養が豊富な森から流れる川の水が海に栄養を運ぶ。広葉樹によって再生された魚付林が海を再生させる藻場を育てる。

森があるから土ができ雨が降り、土があり雨が降るから植物が生え、植物があるから空気ができ動物は呼吸ができ、雨が降るから水が飲め、人が生きられる。こんな単純な言葉では到底表し切れない地球のシステムを、今後僕らは守っていくのだろうか？それともこのまま壊し続けていくのだろうか？

将来に希望の持てない暗澹とした 21 世紀の日本人。自然と真摯に向き合うことによって得る学びの中にこそ、未来を明るくするヒントがあると僕は確信しているのだが…